

国士舘大学審査学位論文

「博士学位請求論文の内容の要旨及び審査結果の要旨」

「近世日本養生論における身体観の研究」

片渕 美穂子

氏名 片渕 美穂子  
学位の種類 博士(体育科学)  
報告番号 乙第51号  
学位授与年月日 令和3年3月20日  
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当  
学位論文題目 近世日本養生論における身体観の研究  
論文審査委員(主査)教授 田原 淳子  
(副査)教授 井上 誠治  
(学外副査)教授 大久保英哲(金沢星稜大学女子短期大学部学長)

### 博士論文の要旨

題目 近世日本養生論における身体観の研究

氏名 片渕 美穂子

## 論文要旨

片淵 美穂子

本研究は、近世日本の養生における身体観、言い換えると身体についての認識論的布置を明らかにするものである。それは、現在の身体的活動を言説レベルで支えている健康の観念ではなく、養生論における身体についての認識的布置を明らかにすることによって、養生に基づいた身体的活動に対する思考や接近法の可能性を示すための作業の一つとなるものである。

本研究の方法は、M. フーコーのいう考古学におけるテキストへの接近法に従い、養生論という身体について言説を可能にしている「見えるもの」と「言いうること」を規定する仕組みとその成立のありようを明らかにしていくことである。それは、作品、記述もしくは描写物の主体としての作者、イデオロギーあるいは学派といったものに還元されない、同時代を貫くあるいは結果として歴史なるものを形成する養生論を可能にする身体把握のありようを問題とした。考察の対象となるテキストへの問いは、簡単に言ってしまうと養生の言説において身体について何が記述されているのかではなく、養生の言説において身体についていかにして記述が可能となっているのかとなる。

これまでの先行研究の検討と方法論的視座より次の7つの課題が設定された。1、17世紀以降の養生論の登場を、生命に対する感覚や感受性の変容と関連づけながら明らかにする課題。2、近世養生論における気概念による身体把握を明らかにする課題。3、気概念による身体把握と通俗道徳性に関して、養生論がどのように機能するのかを解明する課題。4、女、子供、そして老人の身体は、気概念によりどのように捉えられるのかを解明する課題。5、天地を巡る気が身体を巡るというその理解のあり方は、社会的コンテクストにおいてさらにどのように変容するのか、養生論において身体はいかに説明されるのか、いかに理解がなされるのかを明らかにする課題。6、充実した丹田を理想することは、どのように説明され、どのように見出されるのかを明らかにする課題。7、身体近代化以前の、解剖学や生理学と近世日本の養生論との関連を照射することにより、身体がどのように知覚され思考されるのかを解明する課題。以下に示すように、各章はその課題に対応するように構成された。

序章

第II章 気めぐり身体

第I章 近世養生論の誕生

第III章 慾と身体の秩序化

第IV章 養われる身体—女、子ども、老人—	結章
第V章 喩えの身体	補遺 近世養生論における導引術及び調気法—その
第VI章 中心と根源としての丹田	技法の整理—
第VII章 養生論における体内観と解剖学	

第I章では、16世紀後半から17世紀前半における、生命への感受性とそれに関係づけられる養生の社会的な位置づけを明らかにし、身体其自然性の忌避と近世養生論との関連性を論じた。16世紀後半において、養生は万人に望まれたわけではなく、養生の知を学んだのは医家や戦国武士であった。彼らは必要により養生論を学んでいたが、その目的は身体保全以上のものではなかった。17世紀後半を通じて、人為による統御ができないもの、言い換えると身体其自然性が排除されていく。その身体其自然性の排除は、身体や生を人為的な配慮によってコントロール可能なものとした。以後の近世日本養生論は、こうした変化を経て生を価値づけ安寧な生活と長寿を願う技術を語っていくことになる。

第II章では、17世紀から18世紀前半の養生論における身体観を、「気」の概念と陰陽五行という「気」の運行の規則を示す概念とに着目して明らかにした。17世紀後半の沢庵による『医説』及び『骨董録』は、陰陽五行を最も適用した養生論の1つである。そこでは、身体は小天地として、言い換えると身体と天地との相似性を前提として把握されていた。第III章は、18世紀から19世紀中頃までの養生論における身体に関する認識論的布置を、「慾」の概念から照射した。この時期の養生の言説における慾の対処の増大を明らかにし、都市社会における経済的行為と養生における慾への対処の言説は、どのように構成されていたのかを考察した。そして、養生における慾への対処を通じて、身体内部への視線が生み出されたこと、そのことから慾を孕むものとしての自己の身体意識化が生じたことを明らかにした。第IV章では、18世紀から19世紀中頃までの養生論における、女、子ども、そして老人の身体が見出されてくるありようを明らかにした。女は生を産み出す存在であり養生の視線から考慮されるべき存在であるが、また陰の性、不安定な存在、媒介する身体と捉えられた。愛しい対象としての子どもという捉え方は、医学的な観点からして弱い存在であることと一体であった。18世紀前半の香月牛山『老人必要養草』及び貝原益軒『養生訓』は、学問や芸における成就の時として価値を与える一方で、気の弱さや気の減少を指摘し、配慮されるべき存在として老いた者を捉えた。第V章では、18世紀から19世紀中頃までの養生論における、植物・水田、家、そして都市を含んだ多様な身体喩え表象、これらを考察の対象としてその認識論的な布置を明らかにした。近世

日本の養生論においては、天地、水田・植物、家、そして都市などの多様なものに身体が喩えられていた。その喩えのありようは、「気」の概念と農業技術の進展、家意識の変化とも連なっていた。第VI章では、養生論において導引術および調気法を通じて求められた丹田を重要視する身体観のあり様の解明が試みられた。白隠『夜船閑話』が示したように、理想的な丹田は充実した丸みのある下腹部によって象徴されるようになる。19世紀前半に出された医家平野重誠の養生書『病家須知』『養生訣』『延壽帶効用略記』では、丹田の超越的な力をも語られていた。第VII章では、解剖学によって引き起こされた体内への関心が、18世紀末から19世紀前半にどのように展開されたのかが考察され、さらに、東洋医学の五臓六腑観を基盤にしながら解剖学の知が体内観に反映していくありようが示された。絵入り読み物における体内を覗いて真相を示して見せるという構想は、もともと「肚」或いは「腹」という日本語が本心を意味することと、解剖学がもたらした衝撃とに由来した。

次ぎのように結論が導き出されている。1、社会性という関係において把握できない身体は、養生論においては「見えるもの」でも「言いうるもの」でもなかった。18世紀前半までの養生論は、男性武士階級をその読者として想定していることが多く、天地父母への恩としての養生、天地父母の遺体としての身、忠孝としての養生を説いた。それは、道徳的に優っている者としての武士階級という身に対する、言説であった。つまり養生論における養生は、社会性を帯びた身に応じたものであって、養生論は社会性を帯びない身については語り得ない。2、身体は自然環境そして地理的環境の関係において捉えられた。近世日本の養生論では、体内の臓腑であれ、自然環境や地理的環境の関係において語りうるものとなっていた。時間的な流れとしては、前者との関係性において捉えられることは18世紀以降弱まり、以後は後者との関係性において捉えられることが強くなる。3、身体は様々な関係性を結ばせる結節点である。その表象は、血縁によってつながる家筋・家系という家観念、ジェンダー、身分といった社会性、経済システム、自然環境、地理的環境、物理的な意味での家、あらゆるものと通じるものとなっていた。身体は様々な関係性を結ばせる結節点であるため、身体を通じて様々な関係の安定性をもたらすことができた。心身のレベルで見出されたその安定性が丹田であり、それはあらゆる行為の中心であり、超越的な力の源泉としての丹田として捉えられていた。

なお補遺では、近世日本の主に庶民向けの6つの養生書を資料として、導引、按摩、按蹻という用語を導引術の整理の手がかりとして、導引術および調気法の整理を試みている。

# Viewing of Human Body on in Early Modern Japan from the Discourse Perspective of Personal Health Care (Yōjō)

Mihoko KATAFUCHI

## Abstract

This study aims to clarify views of the human body, that is its epistemological arrangement according to the discourse of *yōjō* (traditional personal health care), in early modern Japan. The significance of this study is that it shows the possibility of physical activity based on *yōjō*, not on current ideas of health, which support physical activity on the level of discourse by using the discussion of *yōjō* about the human body. The methodology used applies discourse analysis to *yōjō*. After examining previous studies about *yōjō*, it became clear that there was no consensus about how to view the human body vis-a-vis *yōjō*. Therefore, the following methodology and concrete procedures have been taken. What kind of change of view of the human body did the appearance of *yōjō* discourse in early modern Japan produce? What are the narratives about *qi* flow and *Tanden*? And what kind of view of the human body makes it possible? How does the discourse of *yōjō* in early modern in Japan view the human body and social relations? How is the human body explained and understood? What is the human body compared to and what kind of mechanism make this comparison possible? How did anatomical knowledge change the view of the human body on the discourse of *yōjō*?

Chapter I clarifies the general population's views on the value of life and such topics as infanticide, the unburied dead, and samurai using peasants for swordsmanship practice from the latter part of the 16<sup>th</sup> century to the former part of the 17<sup>th</sup> century. Chapter II clarifies the view of the human body in the theory of *yōjō* from the 17<sup>th</sup> century to the first half of the 18<sup>th</sup> century focusing on the concept of *qi* and the concept of the five elements of ying-yang, which show the rules of *qi*. Chapter III clarifies the view of the human body from the 18<sup>th</sup> century to

the middle of the 19<sup>th</sup> century from the concept of "desire". Chapter IV "The Body Nourished: Women, Children, and the Elderly" clarifies the physical views of women, children, and the elderly in *yōjō* from the 18<sup>th</sup> century to the middle of the 19<sup>th</sup> century. Chapter V discusses and clarifies the use of various metaphors, including plants, paddy fields, houses, and cities, in the discourse of *yōjō* from the 18<sup>th</sup> century to the middle of the 19<sup>th</sup> century, along with their epistemological arrangement. Chapter VI discusses the view of the human body that emphasizes *tanden*, which was sought through *doin* and various breathing methods in the discourse of *yōjō*. Chapter VII "Internal body and Anatomical Knowledge" looks at changing Japanese views of the human body's internal anatomy over a one hundred and forty years period, from the middle of the 18<sup>th</sup> century to the latter part of the 19<sup>th</sup> century, using a variety of popular medical, health care, and literary materials.

氏名 片渕 美穂子  
学位の種類 博士（体育科学）  
報告番号 乙第51号  
学位授与年月日 令和3年3月20日  
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当  
学位論文題目 近世日本養生論における身体観の研究  
論文審査委員（主査）教授 田原 淳子  
（副査）教授 井上 誠治  
（学外副査）教授 大久保英哲（金沢星稜大学女子短期大学部学長）

### 博士論文審査結果の要旨

題目 近世日本養生論における身体観の研究

氏名 片渕 美穂子



令和 3 年 2 月 1 日

国士舘大学

学 長 佐 藤 圭 一 殿

主任審査員

氏 名 田 原 淳 子

印

## 論文審査結果の概要

学位申請者氏名	片 渕 美 穂 子	申請日	令和 2 年 1 0 月 2 6 日
学位論文題目	近世日本養生論における身体観の研究		
主任審査員氏名	田 原 淳 子	印	
審査員氏名	井 上 誠 治	印	
審査員氏名	大 久 保 英 哲	印	
最終試験の合否	合格・不合格		

論 文 審 査 結 果 の 概 要	<p>本研究は、近世日本の養生論における身体観、換言すると、身体についての認識的布置を、言説分析を通じて明らかにしたものである。</p> <p>第1回審査会（令和2年12月2日）において、各審査員の本申請論文に対する全般的な評価は高く、完成度の高い学位論文に仕上げるために主に次の修正意見が出された。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「認識的布置」についての用語説明を行うこと。</li> <li>・日本の身体観についての歴史的な整理をした上で、近世の養生論の説明を行うこと。</li> <li>・身体観が異なると考えられる社会的身分や階級の枠組みの観点で整理すること。</li> <li>・先行研究から導かれる課題と本研究の課題を区別した上で、その後の議論を展開すること。</li> <li>・まとめ方や書式に関する修正（終章、参考文献、図表一覧）</li> </ul> <p>第2回審査会（令和3年1月21日）において、第1回審査会で指摘された箇所は、満足に修正がなされたことが確認された。</p> <p>その後、審査員3名で審議がなされ、全会一致で合格と判断された。</p>
---	--

※400字以内

令和 3 年 2 月 1 日

国土館大学

学 長 佐 藤 圭 一 殿

主任審査員

氏 名 田 原 淳 子 印

## 論文審査結果の要旨

学位申請者名	片 渕 美 穂 子	申請日	令和 2 年 1 0 月 2 6 日
学位論文題目	近世日本養生論における身体観の研究		
最終学歴	広島大学大学院教育学研究科博士課程後期単位修得		
論 文 審 査 結 果 の 要 旨	<p>本研究は、近世日本の養生論における言説において身体がいかん語られているのかを考察することによって、その養生論における身体観、言い換えると、身体についての認識的布置を、言説分析を通じて明らかにしたものである。そこでは、M.フーコーのエピステーメーという概念に着目し、歴史的資料を用いて知覚や思考のありようを探求する方法（考古学）により、養生の言説において身体について何が記述されているのかではなく、いかにして記述が可能となっているかを問うた。</p> <p>養生論の中では、現在身体的活動が語られる場合の身体（たとえば、近代医学の対象となるような身体）ではなく、宗教的に語られる身体、個人的な心情によって語られる身体、空想的に語られる身体が存在する。本論文は、そうした養生の言説を可能にし、言説とともに成立している身体観を描き出すことによって、近世における養生の言説がいかにして可能となっているのかを規定する仕組みの成立のありようを解明した。</p> <p>論文の各章の構成、及びそこで検討された課題を（ ）で、以下に示す。</p> <p>序章</p> <p>第 I 章 近世養生論の誕生（17 世紀以降の養生論の登場を声明に対する感覚や感受性の変容と関連づけながら明らかにする）</p> <p>第 II 章 気めぐる身体（近世養生論における気概念による身体把握を明らかにする）</p> <p>第 III 章 慾と身体の秩序化（気概念による身体把握と通俗道徳性に関して、養生論がどのように機能するのかを解明する）</p> <p>第 IV 章 養われる身体—女、子ども、老人—（女、子ども、老人の身体は、気概念によりどのように捉えられるのかを解明する）</p> <p>第 V 章 喩えの身体（天地を巡る気が身体を巡るというその理解のあり方は、社会的コンテクストにおいてさらにどのように変容するのか、養生論において身体はいかに説明されるのか、いかに理解がなされるのかを明らかにする）</p> <p>第 VI 章 中心と根源としての丹田（充実した丹田を理想とすることは、どのように</p>		

説明され、どのように見出されるのかを明らかにする)

第七章 養生論における体内観と解剖学（身体の近代化以前の、解剖学や生理学と近世日本の養生論との関連を照射することにより、身体がどのように知覚され思考されるのかを解明する）

結章

補遺 近世養生論における導引術及び調気法—その技法の整理—

本研究の結論は、次のように導かれた。第一に、身体は社会性の中に捉えられるということ、第二に、身体は自然環境そして地理的環境の関係において捉えられること、第三に、身体は様々な関係性を結ばせる結節点であったということ、そのために身体を通じて様々な関係の安定性をもたらすことができる、第四に、その安定性を身体のレベルで見出されたのが丹田であったということである。

本研究は、従来の養生論研究ではなされなかったアプローチであり、方法的な開拓にもなった。また、本研究で明らかにされた近世日本の養生論における身体に関する認識的布置は、近世における他領域の言説、例えば、武道論、芸道論・芸能論、修養論、家訓、経営論、教育論などの領域における身体に関する諸問題を考える際の手がかりにもなると考えられる。

学位申請論文の審査会は、以下のとおり2回実施された。

第1回審査会は令和2年12月2日に開催され、申請者による概要説明の後、質疑応答が行われた。各審査員の本申請論文に対する全般的な評価は高く、完成度の高い学位論文に仕上げるために修正することが望ましい箇所として、主に以下の点が指摘された。

- ・序章において、本研究のキーワードである「認識的布置」についての用語説明を行い、本研究で明らかにしようとしていることをより明確化すること。
- ・日本の身体観についての歴史的な整理をした上で、本研究の対象となる近世の養生論の説明を行うこと。
- ・社会的身分や階級の枠組みによって身体観が異なると考えられるので、その観点で整理すること。
- ・先行研究から導かれる課題と本研究の課題の区別を明確にし、各課題に答えるために使用した資料・文献、分析の視点、方法、考察、結論を明瞭に記述すること。
- ・結論としての終章の書き方
- ・書式に関する修正（参考文献、図表一覧）

第1回審査会を受けて、指定された期日までに申請者より修正論文が提出された。

第2回審査会は、令和3年1月21日に実施された。そこでは、申請者による修正箇所の説明を受け、質疑応答が行われた。第1回審査会において指摘された箇所は、審査員の満足に足る修正がなされたことが確認された。

審査会の後、審査員3名で可否について慎重に審議がなされ、全会一致で合格と判断された。